

会員数(56) 州(現在)

逗子地区 153名

葉山地区 259名

大船地区 58名

合計 470名

吟道月報

社団法人 日本詩吟学院 認可
神奈川 碩心会 発行

56-11 月号
第111行 第9巻

根岸 岳 萃
編 村 集
中 山 愛 岳
杉 山 雪 風

吟 ありてこそ

堀内支部C組

白

井

麗

風

四十年も昔になります、旅順市
内に住んでおりました頃の事です。
春ともなれば吉野桜がらんまんと
咲き乱れ、秋には背丈ほどに伸び
たコスモスが華かな色を競はまし
た。そして大陸特有の大きな月が
皎々と輝く頃ともなると、きまっ
て陸軍病院の裏庭あたりから、す
ばらしい吟声が流れてきたもので
す。今にしてみれば、金州城々九
月十三夜であったろうと思われま
すが、当時のあの兵隊さん達は、
今どうしておられるやら、
ちよつと十年前、中村先生のお
誘いをうけて詩舞をはじめ、伺も
なく主人に言われて詩吟をはじめ
ました。思えばほとんど皆勤の

状態で今日まで続けて参りました。
もちろん故場が近いとゆうことが大
きな理由の一つではあったでしょう
が、それよりも、下手ながらも漢詩
を力いっぱい吟ずるとゆうことに何
とも云えない魅力があったように思
えます。
早ハサの一人で息子を交通事故で
亡くしてもう四年になります。詩吟
詩舞を通じて多くのお仲間ができ、
大きな心の支えになりました。皆様
の温かい励ましやお心遣いがあつたれ
ばこそ悲しみをのり越えて来られた
ものと感謝しております。未熟者で
すが精進を怠っておりませんので今後
共よろしく御指導を賜りますよう切
にお願ひ申し上げます。

葉山町文化祭

詩吟、詩舞の会をかえりみて

菊薫る十一月三日、恒例の葉山町文化祭行事の一環として才15回詩吟詩舞の会が行われました。今年は殊のほか盛会で新しい顔、懐レハ顔ぶれにもお目にかかれて満員盛況の賑わいでした。

かえりみますと、この文化祭の才一回目は昭和42年でその時は箏曲、日本舞踊等々おりまじで行われ、その時の番数は15、ついで才二回目からは詩吟詩舞のみの会となり、番数が55、その後年々盛会となり、今年の場合をみると番数142、参加者200名となり、当日の欠席者はわずか四、五名という数字です。すっかり軌道にのっておりますが、これも参加者全員が一致協力の姿勢でのぞむところにあると思ひます。今後の課題としては、あくまでもマンネリ化せぬよう努力し、益々盛会ならん事を期待しております。

(愛岳)

逗子市文化祭

逗子A支部

詩吟、詩舞発表会

村田静風

晴天に恵まれた十一月八日、才引回逗子市文化祭「かながわふるさとまつり参加」詩吟詩舞発表大会が行われ、逗子在住の各流派の方達が図書館ホールに会して、日頃の練習の成果を発表しお互いに楽しい交流が行われ、頑心会からも逗子地区の方達が参加して協力しております。流派によって吟法は少し異つておりますが、同じ吟道を志す者「一吟天地の心」とし同じ町に住む者同志が力を合せ会を盛り上げ、年毎に盛大に行われております。頑心会は会員数も多く、それだけに皆さんが熱の入った吟詩舞を演じていただき、大会の役員も会の運営がスムーズに進行する様にと色々気を配って御来場のお客様も最後まで吟に詩舞に感動をし、会場をあとにされました。私達も来年の二十周年にむかえ、ますますがんばりたいと思ひます。

詩吟にピアノはよく似合う……(二)

平山忠純

(声楽家・日本歌曲吟詠会会長)

詩吟が盛んになったのは江戸時代で、幕末は志士の間で爆発的ブームとなった。詩吟のもつ悲愴的な調子が好まれたからだろう。そして本来、声楽であるべき詩吟がその性格を失ったままで、今日まで継承されて来たといつてよい。大正時代には大きく分けて三派あったものが↓分派が分派を生み、現在では数え切れないほどの流派がある。

流派によっていろいろに吟じられていて、同じ詩でも定まった吟じ方がない。だが音階は五音しかないのので、別の詩でも似たり奇つたりに聞える。そういう矛盾がある。だからよほど詩吟好きの人でも、詩吟の会で全部を聞き通すことは普通である。現実には途中で席を立ってしまつ人が多いようだ。

しかし、もちろん詩吟そのものには大変な魅力がある。詩もすばらしいし、魂を揺さぶるハハ節調を持っているのだ。本当にハハ吟

誦に出合うと、だれしも涙を流さんばかりに感動する。涙を流すほどの感動を与えらるゝのは、他の歌曲では考えられないことだ。詩吟は日本が誇るべき歌曲であると思う。

だが発表が悪く、音程が不正確で、表現力が伴っていないのでは興ざめである。詩吟の指導のほとんどは口授法である。つまり指導者が吟ずるのを聞いて、それをそのまま口真似するのだ。運悪く音感の悪い指導者についた弟子は迷惑の上ない、それでも伴奏なしで音程を正しくするのは至難の業なのだ。だからピアノで伴奏することは、声楽家である私にとつてごく自然な流れとして考えつゝいたことだった。(此号又の号で)

(日経新聞より転載)

◎ 碩心会・大船地区吟道温習会

とき、十一月二十九日(日)九時四十分～三時三十分
ところ、鎌倉市勤労福祉会館

（巻の声）聞えてくるままに……

- ◇ 趣味なのに指導法が固すぎる。型にはめすぎる。
- ◇ 新人が入るとそちらへ重点がかかり、古ハ者はおきざりの感がある（ふがみかな？）
- ◇ 新体詩、長詩等はむずかレハレ、あまりやる気がない。発表する機会もなレ……
- ◇ 指導者は自分自身納得がハってから指導レてほレハレ。俄か仕立だと今日の吟法と明日の吟法が違ハ迷ッてしまッ。
- ◇ 指導の立場になッてはじめて指導者の苦勞がよくわカッた。
- 十人十色の性格の人々をまとめてゆくところ事はとても難シい。忍耐と努力が必要。
- ◇ 全体的にみて古い教室ほど出席率が悪いので苦勞する。マンネリ化、種がつかきた。あきた、むずかレクなくなった等々。
- ◇ 同じ教室内で伝役位がまちまちの場合の指導法に苦慮する。

秋三題

海女の笛飛沫もすでに秋の潮
 秋曉の符を染めて志摩の海
 秋草の籬にくつろぐ日和かな

（昌山）

（追記）

夕月号入会の家久利子に中伝（高山）を追記
 東京より転入

（入）

（堀内支部）堀越正山（再） 葉山町堀内 九七五

（ ） 〇 四六八―七五―八一三ニ

（ ） 〇 四六八―七五―八一三ニ

（ ） 〇 四六八―七五―八一三ニ

（ ） 〇 四六八―七五―八一三ニ

（ ） 〇 四六八―七五―八一三ニ

